



## 第34回春期 ジュニア大使友情使節団

～パラオ・スマイルで帰国～

IFAは、第34回春期ジュニア大使友情使節団パラオ班を、2019年3月25日～4月1日の8日間の日程で実施した。ここに参加団員の旅の記録を紹介する。(関連記事、本誌12、4月号)

### 【3月25日】

今日は事前研修を行った。今回のパラオ班に行く団員は1人1人個性があり、この研修が楽しみになった。日本の挨拶は礼が基本だが、外国の方は握手が基本だと分かった。恥ずかしがらずに相手の目を見て伝えることを大切にしていきたいと感じた。私は今回初めて飛行機に乗るため、とてもワクワクしている。

### 【3月27日】

今日、国会議事堂など、普段めったに入ることができないところを見て回った。16の州でそれぞれの中の一歩偉い人が集まる場所は威圧感があった。インタビューの時「トチダイチョ

ウ」が使われていると言っていた。日本人でもあまり使うことのない単語を用いていて渋いと思った。大統領府では議員の名前が書いてある表があり、日本人の名前、名字が使われていて面白い。午後日本大使館へ行き、パラオと日本についてとても詳しく分かりやすく教えてもらった。



生徒が見つめる中、日本文化紹介

### 【3月28日】

今日は最初にペリリュー島へ行き、戦跡の見学をした。戦車、基地跡などの保存状態には感心したが、あまりにも生々しく、身震ってしまうようなところもあった。しかしそのお陰で戦争と平和について考えるきっかけができた。ペリリュー島での激戦の歴史やその見学を通して学んだこと、考えたことを他の人に伝えたいという思いも芽生えた。ペリリュー島を出てボートに乗り到着したのは、タートルコーブと呼ばれるダイビングスポットだった。シュノーケリングを行い、亀やカラフルな魚を見つけた。大自然に触れ、心が解放された。その後カーブ島へ行き、

カレー作りと星空観察をした。カレーは思った以上においしく、星は思った以上に沢山輝いていた。

### 【3月29日】

今日は小中学校を見学した。とても広くて驚いた。そこではパラオの生徒たちと給食に魚とご飯を食べた。そして沢山の生徒たちの前で日本文化紹介をした。そろばんや和菓子、剣道の紹介、そしてみんなで「我は海の子」と「ふるさと」を歌った。その後高校に行った。みんな笑顔で親切にしてくれて、とても嬉しかった。

### 【3月30日】

今日は終日ホストファミリーと過ごした。日本パラオ友情の橋の下にあるビーチで、ホストファミリーが3家族集まってバーベキューをした。自分のファミリーだけでなく他のファミリーも皆本当に優しく包容力があり、子供たちもとても元気で私は何の苦もなく一日を過ごすことができた。明日でお別れかと思うと寂しいが、最後まで感謝の気持ちを忘れないようにしたい。

### 【4月1日】

今私たちは帰国の途についている。沢山味わった「初めて」や異国パラオについての知識、忘れてはいけないのは大自然に触れたりホストファミリーとの交流で感じた感動や幸せ。目に見えるお土産が壊れても、目に見えないものこそ大切にしたい。感謝を忘れず、来る新時代を背負うに相応した人物となれるようにがんばっていきたい。

(参加者日誌より抜粋、校正：編集)

## 世界万華鏡

ニュージーランド その③ キャンベル和美 クライストチャーチ惨劇

1週間前の3月15日金曜日。その日は私の中学からの友人家族がクライストチャーチに来る日。空港へ迎えに行く途中でモスクでの銃乱射事件が起こり、空港に着いて知りました。午前中までオフィスで働いていましたが、1km位の所にそのモスクがあります。

週末、そのときに亡くなった50人の顔写真がニュースに上がってきました。その中に、私の友人がいました。同じオフィススペースで働いていた人です。去年も一昨年もほぼ毎日のように、「Good morning. How are you?」と会話をしていました。彼がお祈りしているのを見たこともあるし、彼がイスラム教だということも知っていたのですが、とにかく、まさか、まさかという思いでした。そして、今はただただ寂しくて悲しいです。Dr. Haroon Mohammed が私の友人です。  
<https://interactives.stuff.co.nz/2019/03/end-of-our-innocence/>

人生何があるかわからないですね。それが生きていくということなのだと思うようになってきました。だから、誠実にまじめにコツコツと生きていくしかないと思っています。

クライストチャーチ市長が書かれた

留学生とその保護者宛の手紙を是非読んでください。私が訳しました。

◇

### ●留学生の皆さんとそのご家族へ

クライストチャーチで発生した悲劇的事件は多くの人が亡くなったという事実により、大きな悲しみを私たち地域社会にもたらしています。あのような襲撃がクライストチャーチで、またはニュージーランドのどこかで起こるということは信じ難いことです。

クライストチャーチという市は全ての文化、宗教そして様々なバックグラウンドを持つ人々を暖かく迎え入れている都市です。

先週の金曜日以降、クライストチャーチにあふれ出ている大きな悲しみとともに、ここクライストチャーチに住む人々が被害にあった人々に対して表している愛と思いやりは、クライストチャーチ市民が一つにまとまり、お互いを心配し合い気遣っていることの証しです。

私たちは事件に屈して憎悪や分裂を起こすことはありません。このような悲惨な襲撃を予め計画し実行する目的でここに来た、一人の過激主義者の仕業により、クライストチャーチという

場所が定義されることはありません。

ジャッセンダ・アーデン首相は先週の土曜日にイスラム教徒の団体リーダーたちに対して、『これはニュージーランドではありません』と述べています。

そして私はクライストチャーチの市長として『これがクライストチャーチではありません』と申し上げます。

生徒さんと生徒さんのご家族に、皆さんを安全な環境へ迎え入れることに全力を注ぐということを断言したいと思います。皆さんはクライストチャーチに歓迎されていますし、皆さんが安全であると感じ、この地の一員であることを感じるようになります。皆さんのサポートについて詳しくは教育省のホームページを参照してください。

愛とともに Aroha nui

エン・ダールジュール Lianne Dalziel

クライストチャーチ市長

平成31年4月17日発行  
一般社団法人 国際フレンドシップ協会  
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12  
麻布台ロイヤルプラザ703

発行責任者：及川 伊佐子  
編集 集：事務局 03(3582)3021  
印刷 刷：ダイト印刷株式会社